

小学校外国語活動・外国語科における効果的な音声指導の在り方

教科教育高度化分野(22822161)井上 桜

アルファベットの名称の読み方と文字の認識に関する調査を実施し、6年生でその両者が定着していることを確認した。その結果を踏まえ、6年生外国語科の授業で、フォニックスを取り入れた授業を実践した。授業についての児童の振り返りや調査から、児童の文字認識や英語学習の情意面に与えるフォニックスの有効性が推察された。

[キーワード] 小学校外国語活動・外国語科, フォニックス, アルファベット, 大文字, 小文字

1 問題と目的

(1) 現状と課題

小学校で外国語活動・外国語科の授業を実践していく中で、聞くことと話すことについて課題があると感じていた。教科書の各 Unit で設定されている言語活動において、目的・場面・状況を意識した型にはまらない積極的なコミュニケーション活動が求められているにも関わらず、型にはまったやり取りや発表になってしまい、自分事としてのコミュニケーションが難しいというのが現状である。小学校外国語活動及び外国語科の授業の中で、聞くことと話すことに焦点を当てた指導を進めることで、児童に「聞けた」、「話せた」という自信をもたせたい。その後、「どうにかして英語を使ってコミュニケーションをしたい。」という情意面を醸成していきたいと考えた。

そこで、児童の聞く力と話す力を育てるために有効だとされているフォニックスを取り入れて授業を実践し、その効果を検証する。

(2) 先行研究の検討

①フォニックスについて

フォニックスは、文字とそれに対応する音の関係を意識的に教える指導法であり、英語圏では初期の読み書き指導として推奨されている(城一, 2016)。

また、『小学校外国語活動・外国語研修ガイドブック』3 英語の目標(1)外国語活動の①聞くことにおいて「文字の読み方が発音されるのを聞いた際に、どの文字であるかが分かるようにする」ことも目標になっている。『「文字の読み方」とは、文字の“名称の読み方”と、“文字が持っている音”(例えば、B という文字は/bi:/

という名称と/b/という音を持っている)の両方を指すが、外国語活動では、前者のみを指していることに注意したい。』とある。また、(1)外国語の②聞くことには『先述したように、「文字の読み方」には文字の“名称の読み方”と、“文字が持っている音”がある。外国語活動と異なり、外国語科では“文字が持っている音”まで加えて指導する。ただし、音と綴りの関係まで指導することを意味するのではないことに留意したい。』とある。したがって、発達段階に合わせてフォニックスを取り入れていく必要があると考える。

②外国語学習とフォニックス

英語を母語とする児童にとってアルファベット学習がどのような影響を与えるかということについて研究したアダムスは、アルファベットの字形とその名前が分かる児童は、文字とその文字が持つ音についても容易に習得できると述べている。また、フォニックスを導入する前の注意点として、児童がアルファベットの大きくて小文字の字形と、その文字の読み方を十分に理解している必要があるとされている(アレン玉井, 2019)。言い換えると、アルファベットの名称の読み方ができるとその文字が持っている音も覚えやすいといえる。

(3) 本研究の目的

本研究は、アルファベットの名称の読み方と文字の形に関する調査を行い、その結果をもとに、フォニックスを授業の中に取り入れていきながら児童の聞く力と話す力を向上させることを目的としている。調査の結果や児童の振り

返り、アンケートの結果を踏まえ、発達段階に応じた小学校外国語活動・外国語科における音声指導の在り方を提案し、その有効性を検証する。

2 研究1：アルファベットの名称の読み方と文字の形に関する調査

(1) 方法と対象

山形県内のA小学校の3年生から6年生までの全8クラスで調査を実施した。各クラスに訪問して、朝の時間の15分で行った。各学年の人数は表1の通りである。

(2) アルファベット聞き取り調査の実施

この調査は、アルファベットの名称の読み方と文字の形が一致しているかどうかをみる目的で行った。アルファベット大文字と小文字の2種類それぞれについて順不同で10個のアルファベットの名称の読み方を発音し、大文字と小文字がアトランダムに並んだ図1のワークシートを使って、聞こえてきたアルファベットに印をつけてもらった。基本的に1つのアルファベットにつき、間を取りながらゆっくりはつきりと2回繰り返して出題した。

アルファベット聞き取り調査										
年 名 前 ()										
☆聞こえてきたアルファベットの下に番号を書きましよう。										
<ステップ1>										
S	Y	F	P	M	I	T	C	W		
L	G	Z	O	A	U	H	X	Q		
R	B	N	E	V	K	D	J			
<ステップ2>										
i	y	d	b	f	z	m	p	g		
w	e	n	r	j	x	o	c	u		
k	s	h	v	f	q	a	l			

図1 調査で用いたワークシート

(3) 結果と考察

1問1点として採点し、クラスの正答率を表2と表3にまとめた。

それぞれの学年の正答率を比較していく。今回は5年1組の大文字の10点を獲得した割合が89%と非常に高く、比較が難しかったため除外して考えることとした。9点以上の児童は、アルファベットの名称の読み方と文字の形をおおむね理解していると仮定した。大文字に関して9割以上の正答率を見ていくと、6年生は80%、5年生は64%、4年生は60%、3年生は53%となった。また、小

文字については、6年生が74%、5年生は60%、4年生は38%、3年生は29%であった。この結果から、全学年で小文字よりも大文字の正答率が高く、学年が上がるにつれて大文字、小文字ともに正答率が上がっていることが分かる。

また、回答用紙を詳細に分析すると、学年が上がるにしたがって、アルファベットの名称の読み

表2 アルファベット聞き取り調査 大文字の正答率

	10点	9点	8点	7点	6点	5点	4点	3点	2点	1点	0点
6年1組	50%	31%	16%	3%	0%	0%	0%	0%	0%	0%	0%
6年2組	18%	61%	11%	11%	0%	0%	0%	0%	0%	0%	0%
5年1組	89%	4%	4%	4%	0%	0%	0%	0%	0%	0%	0%
5年2組	32%	32%	12%	16%	4%	4%	0%	0%	0%	0%	0%
4年1組	30%	22%	15%	7%	7%	7%	4%	4%	4%	0%	0%
4年2組	42%	25%	13%	8%	4%	4%	4%	0%	0%	0%	0%
3年1組	14%	24%	14%	10%	5%	14%	5%	10%	5%	0%	0%
3年2組	38%	29%	10%	0%	0%	14%	0%	0%	0%	5%	5%

表3 アルファベット聞き取り調査 小文字の正答率

	10点	9点	8点	7点	6点	5点	4点	3点	2点	1点	0点
6年1組	52%	21%	18%	3%	3%	0%	3%	0%	0%	0%	0%
6年2組	36%	39%	4%	0%	7%	4%	0%	11%	0%	0%	0%
5年1組	48%	19%	15%	4%	7%	0%	0%	4%	4%	0%	0%
5年2組	44%	16%	8%	4%	12%	8%	4%	4%	0%	0%	0%
4年1組	15%	15%	15%	11%	4%	11%	7%	7%	11%	4%	0%
4年2組	13%	33%	13%	8%	8%	13%	4%	0%	0%	4%	4%
3年1組	19%	5%	0%	10%	10%	5%	19%	5%	14%	10%	5%
3年2組	5%	29%	19%	0%	10%	19%	5%	5%	0%	5%	5%

方と文字の形が分かっているというよりも、“b”と“v”で迷っているなど発音が似ているため誤答になっている回答が多くあった。このことから、形は知っているが発音での区別に難しさを感じている児童が多いということがうかがえた。また、聞き取り調査を実施している際、出題者の口元を注視している児童も数名いたことから、口の動きで発音の違いを認識しようとしている児童もいたのではないかとと思われる。

授業を行った6年1組に着目すると、9点以上の成績だった児童は、大文字が81%、小文字が73%であった。したがって、大文字に関しては、クラスの大部分がアルファベットの名称の読み方を理解しており、アルファベットの形も覚えていることが分かった。以上のことを踏まえ、研究2を進めていくことにした。

3 研究2：フォニックスを取り入れた授業の実践

(1) 方法と内容

アルファベットの文字の形と名称の読み方が定着していると考えられる6年1組の授業でフォニ

ックスを導入することとし、8 時間単位のうち 5 時間で2分42秒のフォニックスソングを取り入れた活動を行った。その他にも新出単語の練習やその定着を図る目的で行ったかるたなどのゲームやアクティビティでもフォニックスを意識した発音練習を行った。

(2) 授業から見えた児童の姿

授業中の児童の様子や振り返りから、家でもフォニックスの歌に合わせて発音を練習している児童や、フォニックスを意識して英語の音声を聞いたり、やり取り練習をしたりしている児童がいることが分かった。また、フォニックスを取り入れる際、聞く力を向上させるために行うという目的を児童と共有したところ、児童の振り返りの中に、「先生は聞く力をつけるためと言っていたけれど、聞く+話すのどちらもできたし、分からない人に発音を教えることもできました。」という感想もみられた。はじめは一つ一つのアルファベットの音を聞くことだけに集中していたが、回数を重ねていくごとにリズムに合わせて口に出して発音している児童の様子も見られた。リスニング中心の学習から、リスニングとスピーキングの両方を同時に学習する姿へと変容していったと考えられる。

フォニックスを取り入れた第 1 回目の授業の振り返りを見ると、「hit の h は“ヒッ”と言っているけれど、h だけだと“ハァ”という発音になっていた。」「フォニックスで発音するときは“a (エイ)でも、読んだり書いたりするときは apple (アーポオ)と違うことが分かった。」「フォニックスを意識して英語を読んだり聞いたりできた。」「フォニックスで聞き取れることが多くなった。」などの感想が見られた。初めてフォニックスを導入した授業ではあったが、フォニックスの有効性が感じられた。

単元の最後の 8 時間目には、自分が考えた世界とつながるオリジナルフードの紹介をビブリアバトル形式で実施した。発表会へ向けての練習の中で、「ブッ、ブッ、Berry Pancakes …」のように、自分の発表する英文の文頭の単語の子音を数回発音する児童の姿が見られた。このことから、フォニックスで学んだことを発表にも活かそうとしていたことがうかがえる。

(3) アンケートの実施と結果

実習最終日に、「フォニックスをやってみてどうでしたか。できるだけ詳しく教えてください。(フ

ォニックスをやる前と比べてできるようになったことや感想など)」という設問でフォニックスについての自由記述による調査を行った。児童の回答を AI テキストマイニングで分析した(図 2)。

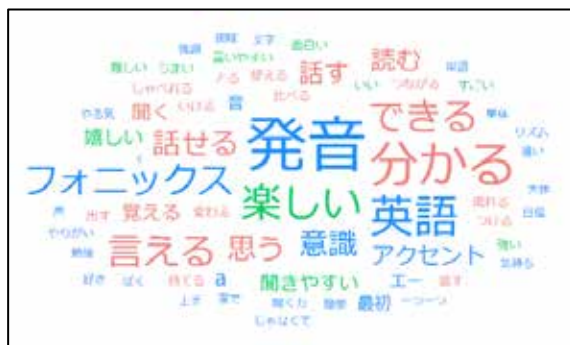


図 2 テキストマイニングの分析結果
(フォニックスについての振り返り)

図 2 の結果を出現頻度順にまとめたものが表 4 である。

表 4 テキストマイニングの分析結果の出現頻度順

1位	発音
2位	英語・分かる
3位	フォニックス・楽しい・言える・できる
4位	意識・話せる・思う
5位	アクセント・話す・読む

「分かる」、「楽しい」、「言える」、「できる」、「話せる」という結果から、フォニックスが児童に自己肯定感を与えていることが分かった。動画を観ながらリズムに合わせて真似して声に出してみる活動は、正解を求められないとともに自分が言いやすいところから声に出して練習でき、言えるまでは聞くことに集中できる。自分のペースに合わせて学習できる保証があるからこそ表出された言葉なのではないだろうか。

フォニックスは、学力差や学習の進度も関係なく学ぶことができるという点から児童の学習に対する抵抗感を軽減させていると考えられる。また、継続して行うことで、児童の聞く力と話す力をつけることができる学習活動であるといえるのではないだろうか。

(4) アルファベット名称の読み方と文字の形に関する調査の分析・考察

8 回の外国語の授業実施後に、アルファベット聞き取り調査を再度実施した。調査方法は 1 回目と同様、大文字と小文字をアトラダムに並べた図 1 を用いて行った。出題したアルファベットも

1回目と同じであった。表5と表6は、大文字と小文字のそれぞれについての正答率を表したものである。

表5 アルファベット聞き取り調査 大文字の正答率（6年1組）

	10点	9点	8点	7点	6点	5点	4点	3点	2点	1点	0点
1回目	50%	31%	16%	3%	0%	0%	0%	0%	0%	0%	0%
2回目	66%	19%	9%	0%	3%	0%	3%	0%	0%	0%	0%

表6 アルファベット聞き取り調査 小文字の正答率（6年1組）

	10点	9点	8点	7点	6点	5点	4点	3点	2点	1点	0点
1回目	52%	21%	18%	3%	3%	0%	3%	0%	0%	0%	0%
2回目	58%	15%	15%	3%	0%	0%	3%	3%	3%	0%	0%

大文字の正答率を比較していく。9点以上をみていくと、81%から85%へと4%増えている。10点満点を見ていくと、50%から66%へと16%増えている。人数にすると5名増えていることになる。次に、小文字の正答率を比較すると、9点以上では、全く変化しなかったが、10点満点だけを見ていくと、52%から58%へと6%増えている。人数にすると、2名増えている。8回だけの授業ではあったが、フォニックスの名称の読み方と文字の認識に与える有効性が推測できる。

4 全体的な考察

小学校外国語の授業においてアルファベットの名称の読み方が定着している児童にフォニックスを取り入れた授業を実践することは、文字認識能力(知識・技能)を向上させるだけでなく、情意面でもプラスの効果をもたらすことが推察される。

今回は、5回の授業でフォニックスソングを練習した。また、フォニックスの要素を取り入れた単語練習やアクティビティを一部取り入れた短期的な取組(8時間単位)であった。今後は、フォニックスを長期的に継続していった場合の効果について検証していく。また、アルファベットの学習を始めたばかりでアルファベットの名称の読み方が定着していない3・4年生の外国語活動の中に、フォニックスを導入した際に同様のプラスの効果が見られるか、または逆に弊害が生じるかどうかという点についても検証したい。特に3年生については、国語科でローマ字の学習も入る。ローマ字がアルファベットの名称の読み方や文字が持っている音に影響を与えているのかということについても調査していきたい。

今回使用したフォニックスソングでは、小文字のみが表示されている教材を使用した(図3参照)

が、大文字と小文字の両方が入った教材を使った時の正答率の変化についても調査してみたい。



図3 フォニックスソングの画像の一部
<https://www.youtube.com/watch?v=saF3-foXWAY>

今後は、小学校3・4年生と5・6年生といった発達段階やそれぞれの学年でのアルファベットの名称の読み方の定着率を

ベースにした音声指導を実践し、その効果について現任校で複数の学年を対象に研究を進めていきたいと考えている。

引用・参考文献

- アレン玉井光江(2013)「公立小学校における Synthetic Phonics の実践—アルファベット知識と音韻認識能力の発達—」、『ARCLE REVIEW』第7巻, 68-78.
- アレン玉井光江(2019)『小学校英語の文字指導 リタラシー指導の理論と実践』, 東京書籍.
- 城一道子(2016)「フォニックス・ライム・チャンツ・歌を活用した発音指導の教育効果—TAE(Thinking at the Edge)を応用した分析—」、『教育総合研究：江戸川大学教職課程センター紀要』第4巻, 1-12.
- 木澤利英子(2018)「シンセティック・フォニックス指導とその効果—児童の非単語反復学習及びデコーディング力に着目して—」、『関東甲信越英語教育学会誌』第32巻, 71-84.
- 松土清(2021)「小学校教室で使える英語音声学」、『山梨県立大学国際政策学部紀要』第16号, 56-72
- 文部科学省「小学校外国語活動・外国語研修ガイドブック」, https://www.mext.go.jp/a_menu/kokusai/gaikokugo/1387503.htm (最終閲覧日 2023年1月27日)

Effective Teaching Methods for Speaking and Listening Activities in Foreign Language Classes at Elementary Schools
 Sakura INOUE